

二〇二三年二月三〇日

枯蔦の面輪に絡む磨崖仏  
尻もちの後引く痛さ年詰まる  
窓拭きの母娘姦し年用意  
一年の無事顧みつ初湯殿

愛正  
はく子  
むべ  
たか子

二〇二三年二月二六日

年用意子の手夫の手借りもしつ  
友逝けり吾が冬帽子褒めしまま  
年ごとに動かぬ手足日の短  
蓋凍てし郵便受けに回覧板  
賀状書く金釘なれど心込め

満天  
あひる  
満天  
明日香  
みきえ

二〇二三年二月二九日

神木の紙垂も真白く年用意  
ため息のごとし暖機の排気ガス  
頑張るをやめてゆるゆる年の暮  
大海老を奮発したる晦日蕎麦  
耳掻きの膝あけて待つ縁小春  
手套脱ぎま白き献花捧げけり  
立つ湯気もまさら新調炊飯器

なつき  
かえる  
たか子  
千鶴  
ひのと  
あひる  
やよい

二〇二三年二月二五日

長々と貨物列車は枯野行く  
日当たりの窓に背伸びすシクラメン  
二〇二三年二月二四日

かえる  
董雨  
あひる  
ひのと  
千鶴  
みきえ

二〇二三年二月二八日

おもちや抱き仕事納めの夫帰る  
母偲ぶ形見のシヨール暖かし  
冬日満つ砂場に残る砂の城  
鉄瓶の湯気に塞がる通し土間  
溜池に魚影の透けるうす水  
厨いま大騒動や松葉蟹

なつき  
きよえ  
なつき  
素秀  
かえる  
あひる

二〇二三年二月二七日

賀状書くにぶる指先励ましつ  
数へ日やうたた寝の母寧らけく  
噓して見失ひたる星座かな  
モノクロと化して生駒峯眠りけり  
数へ日やまだ田に残る人の居て

はく子  
あひる  
ひのと  
たか子  
千鶴

毎日句会みのる選・二〇二三年一月二日